

高崎節子と福岡女学校

大 國 眞 希

高崎節子は「子どもや女性の人權尊重と福祉の充実を訴えて奔走した労働省（現厚生労働省）官僚」と伝えられる（注1）。一九四八（昭二三）年に労働省婦人少年局、福岡職員室主任（現室長）、翌四九年に神奈川県婦人少年室長、一九五三年に東京婦人少年室長を経て、一九六一年に労働省婦人少年局・婦人少年行政監察官に就任、一九六四年に、法務省東京補導院へ異動となり、後に院長を務める。これらの校務の傍ら（また校務に就く以前から）、小説の執筆活動もおこなっていた（注2）。一九五七（昭三二）年五月八日朝日新聞（東京・朝刊 三面）「高崎節子 人寸評」には労働省東京婦人少年室長としての高崎節子が次のように紹介されている。

婦人少年室長になって十年になる。その間、映画化された『混血児』と『売られ行く子どもたち』の二冊の本を書いた。二つとも、陽のあたらぬ子どもたちの問題だ。小さな、力のないものは訴えることさえできない、その味方になるんだ、とつねにいう。（中略）

クリスチャンの母親に育てられ、福岡女専国文科を出た。女学校の先生もした。カロツサとフィリップを愛する文学少女だ。私も貧しい人々の哀歌を書きたい、と仕事の合間に資料を集めている。

家に帰ると十二時まで寝て、夜中の四時間、本を読み、また寝るといふ変った日課。その四時間が最大の楽しみという。

引用部にある「女学校の先生もした」とあるのは、福岡女学校（現・福岡女学院）を指す。高崎節子の福岡女学校在職期間は一九四二（昭一七）年から一九四八（昭二三）年までで、専攻科の担任もしていた（注4）。その時期は一九四五年（昭二〇）年の福岡大空襲で講堂と校舎を消失し、焼け野原で礼拝を守った「青空礼拝」（注5）の時期と重なる。

福岡女学校校友会発行の『若樹 新築落成記念誌』（昭二二・十二）には、終戦後に与えられた最初の教室が「畳も窓ガラスもなく、床の間には、ネズミの死体が悪臭を放つて」いて「障子は骨ばかりで、所々に風雨にたゞきつけられた茶色の紙が、こびりついて」いる有様であった様子が描かれている。そのとき、高崎節子は「まあいわば、昔の寺子屋で、中々風流ですわね」と言つて、皆思わず笑い出したと生徒によって回想されている。また、福岡女学校について書かれた、高崎節子自身の言葉も読むことができる。（注6）。「思い出すことなど」と題した、その随想から一部抜粋してみよう。

福岡女学校に勤めていますことの中に、幾つかの喜^マびが私にあります。みんながさうでありますように、私は私なりの感じ方で朝の礼拝はたまらなく嬉しいのです。校長先生が御立ちになつて前に御進みになります。私達も静かに立ちます。やがて、生徒達の足音が遠くから近づいてまいります。私は此の瞬間がとても好きで、じつと眼をつぶつて、ピアノの旋律と、スツ、スツ、スツ、スツ、という、みんなの足音に、今日も生きて、と、美しい幸福な思いに寂かに切々とうたれるのです。讚美歌を唱つている時も何か幸福な気持ちで一ぱいなのです。

が、私はどちらかと云えば、自分は唱わないで、じつと聞いていたのです。よくそうします。五三八番は好きな讚美歌で、何か哀調のあるリズムにひかれますのは、東洋人の宿命でしょうか。聞いている内に不思議な哀感に涙がこみ上げてきたりします。唱っている人達が聖少女の群でありますためでしょうか、若い女性のコーラスの美しさは、むしろ神秘的なものをはらんでいるようです。講堂の心持ち暗さも、荘重な流れを漂わせています。何か、シン／＼とした、胸の底までにじみこむ様な礼拝の空気なのです。朝の礼拝の時程私は謙きよになることはありません。そしてしみ／＼と幸福だと思ふ時は他にありません。今は最早、私にとって朝の礼拝は一つの郷愁でさえあるのです。私は他愛なく、涙もろく、感情の激しい人間でありますため、そして、大変なロマンチストでありますため、礼拝のあの雰囲気の中に自分をすつかりとけこませて、何か美しい世界を考えたり致します。（中略）焼けたのは真実の出来事であったかしらと思いました。何か、うそのようで、何年も前からいゝえ、ずつと／＼以前から、同じようにこの講堂で朝毎の礼拝が続けられてきたように思われるのです。あの頃の先生、生徒、みんなそのまゝ、そつと、そこにいらつしやるように思えるのです。赤いバラも、窓のあたりにその花びらを見せているようですし、白百合も一本窓の下にひっそり咲いているような気がします。くちなしも香りましようし、もくせいもふくいくと香りましよう。梁毎の十字架が今もなお、にぶい金色の光を投げているようです。校長先生の静かなお祈りと、深い愛情の御心の中に、幾人、幾十人、幾百人の聖少女達が魂の呼び声に涙し、よろこび、そして泣きながら「美しき青きドナウ」を唱つて巣立つて行つた事でしょう。おそくまで集会室で「別れの曲」を弾いていた人達もいました。みんな遠い戦の彼方の夢になりましたが、夢ではなく現実の姿でした。昔の現実をしのぶよすがは何一つ残っていませんけれど、やがて、今学んでいる人達の美しい青春の憶いは此の講堂にぎざまれてゆく事でしょう。それは福岡女学校の存在する限り続けられてゆくいしぶみであるはずで

「若樹」のこのときの発行人は「和栗信子」とある。編集委員にも「五年 和栗」の名が並び、彼女の署名入り記事も掲載されている。彼女は『むらさき——高崎節子追悼集——』（一九八一）にも、「福岡女学校教員時代生徒」として「遺された言葉」を寄稿している（注7）。そこから浮かび上がる教師としての高崎節子を追ってみよう。「動員学徒として働いていた工場の控室」で森鷗外の「高瀬舟」を解説し、「校舎の焼跡整理の合間」に宮澤賢治の「山猫とどんぐり」を生徒に読む姿が紹介されている。「平家物語」を暗誦させ、「更科日記」や「徒然草」の「おもしろみ」を語るなど、「文学の味わい」を感じとらせるのに熱心だったという。更に、「女の一生」の杉村春子を学校に招いての講演会や、前進座「ヴェニス商人」の体育館での公演をおこなったことも伝えられている。「寡婦マルタ」の話も印象的だ。高崎節子は女学校を離れるとき、最後に生徒たちに次のような話をしたという。

「恵まれた家庭に生まれ大切に育てられた少女マルタは成人して嫁ぎ一児をもうけます。幸せな生活が続くかに見えたのですが、ある日それは夫の死によって突然中断されます。マルタは娘時代に受けた稽古事で生計を立てようとします。しかし最初のうちは教えられても、やがて生徒たちは上達し、もうそれ以上教えることはできなくなります。哀れなマルタは自ら生命を絶ってしまいました。どうか皆さん。何か一つ、自分のものをしっかりと身につけてください」

この「遺された言葉」が掲載された『むらさき』は高崎節子女史三周年忌念出版実行委員会が編集にあたっている。同委員会は、当時東京都新聞販売同業組合の組合長であった大門英雄の呼びかけによって開催され（注8）、高崎節子が「新聞を配る少年保護育成の会」を提唱、設立の世話人となり、働く年少者の保護運動に尽力したことを

伝える（注9）。

神崎清は高崎節子について「子どもにたいしてずいぶんするどい観察とこまやかな愛情の働く人だと感心していたが、この混血児の本（引用者注・高崎節子が書いた『混血児』を指す）のゲラ刷に目をとおして、いつそうその感をふかくした。高崎君は、一個のヒューマニストとして、身売り児といわず、混血児といわず、あらゆる不幸な子どもよき友だちになつていたのであろう」と評している（注10）。

高崎節子が書いた『混血児』は、一九五二（昭二七）に同光社磯部書房より刊行された。一九五二年といえば、この前後からメディア報道の在り方や政府の取り組みに変化が訪れたと下地ローレンス吉孝が指摘している（注11）ように、戦後直後に生まれた「混血児」が学齢期に達し、その就学をめぐるメディアでも活発に取り上げられた時期である。翌年に封切られた映画『混血児』（高崎節子『混血児』原作）（注12）も含めて、本書はエリザベス・サンダース・ホームや就学に関連づけて取り上げられることが多かった（注13）。作者の高崎節子本人は、「ルポルタージュでもありませんし、小説でもありません。たゞ、混血児の持つていろいろ／＼な問題を見聞きした実際の事実を織り交せて、今日のテーゼ」として世の中に投げ出してみたにすぎない」とする（注14）が、事実を描いたルポルタージュの側面を強調されることが多い（注15）。つまり、神奈川県少年室長が、現地（エリザベス・サンダース・ホーム（注16））などを中心に、神奈川県下の「混血児」をめぐる状況を客観的に叙述していると評されているのだ。しかし、高崎節子の『混血児』は評論的な形式で論じられている部分だけではなく、小説的な特徴をもって描かれている小品集も並ぶ、いわば二部構成で編まれている（注17）。

本稿では、福岡女学校との関わりから、小説部分の最後に置かれている「マグノリアの花咲く家」に目をむけてみる。本作は神奈川ではなく、福岡を舞台とした小説だ。あらずじを確認しておく、三人姉妹の民子、友子、幸子とその母親は、幼いマリを引き取って暮らしている、そのなかで起こった出来事が描かれる。

民子は『城南線』の向う側にある女学校の先生」で、幸子は『急行電車』の踏切の近くにある女学校の先生」をしている。マリは民子の「教えていた生徒と、アメリカの兵隊との間」に生まれた。マリの生みの母親は、「お天気の時は一人で元氣よく生きていらつしやい。雨が降つたら、あなた方の人生に、若し暗い雨が降るようなことがあつたら、あたしを覚えて」と言ってくれた民子先生を頼り、マリを託したのだ。ある日、マリの姿が見えなくなる。民子が勤めている女学校で「全校の皆様、皆様に申しあげます。上月民子先生のおうちの、マリちゃんという二つになるお嬢さんが迷子になりました」「皆様どうぞ御協力お願いいたします」と拡声器が鳴り、同様に幸子の女学校でも校内放送されて、両方の女学校の女学生が全福岡市に散っていった。大名町の海岸で子どもたちに取り囲まれていたマリちゃんをF女学校の生徒が保護し、マリは無事に戻る。それから五年経っても、迷子になっていた八時間のことは、いまだに疑問のままである。マリは満六歳になり、今年も六月になって、マグノリアが白く、おおらかに咲く家の玄関の敷石でおまごことをしている。マグノリアの落ちた大きな花卉の「こぼんとまるくくぼんだところに水をいれたりしているのです。」との一文で、この物語は結ばれる。

映画『混血児』は、原作の『混血児』のなかに描かれた逸話をよくまとめて映像化しているが、「マグノリアの花咲く家」からはとられていない（注18）。また、『城南線』の向こう側の女学校」「急行電車』の踏切りの近くにある女学校」などの記述があることから、小説のもとになった事実を探したくなる（注19）。しかし、ドキュメントの側面ばかりを追ってしまつては、小説のフォーマットを用いて書かれたことの意味を見失うのではないだろうか。

高崎節子『混血児』の小説分析については稿に改めて論じたいが、もうひとつだけ、女学校との関わりから触れておきたい。以前、筆者は、〈蝶〉表象に注目し（注20）、戦時下の自由／不自由を視野にいれながら、福岡女学院とのかかわりから起草した（注21）が、はたして、高崎節子の『混血児』の「高原の子」の後半部分で語ら

れる讓二の物語のなかにも、蝶が登場する。

讓二は祖父母のK高原で暮らしている。祖父母は讓二の「魂が傷つけられないために」「讓二を守りたい」と決心していて、小学校入学に關しても三年前から準備を始めている。その準備の方法のひとつが讓二が「異常の興味を持つている」蝶を採集して、その標本を学校に寄贈することなのだ。この標本にされた〈蝶〉をいかに感受するか。その答えはそれぞれの読み手に去来するのであろうが、そのことこそが文学作品ならではの問いとなる。

高崎節子は晩年、闘病生活のなかでも創作活動をあきらめなかった(注22)。「混血児」に収められた短篇たちも小説として読まれることを待っている。そして、ルポルタージュの側面に加えて、小説を小説として読むことにより、高崎節子の功績もまた明らかになる面があるのではないだろうか(注23)。

註

1. 「女性、児童福祉の先覚者に光 福岡・遠賀町出身の官僚 高崎節子さん 終戦後の混乱期に奔走 小説で社会問題告発も」(西日本新聞「二〇一九・二・一三、朝刊 一三面」)。ここでは、高崎節子の『混血児』を、「日本人からさげすまれ、さらに黒人の子か白人の子かで差別されながら施設で育つ子どもたちの姿を描写。翌年、奈良岡朋子さんらの主演で映画化された」と紹介している。
2. 高崎節子の生涯については、水口一志「人物肖像・時代の波しぶきを浴びて(4) 戦後の女性・児童保護に尽力した先駆者 高崎節子 逆境の人々への熱い眼差し 福岡から東京へ 行政の最前線で活躍」(『西日本文化』四九四号、二〇二〇・四)、「力のない者のためにパンドラの箱を開けた官僚―高崎節子 その生涯の軌跡―」(『広報おんが』一一六〇号、二〇一八・八)、「高崎節子の軌跡―混血児・人身売買・婦人少年労働―(福岡女たちの戦後)二号、戦後の女性記録継承プロジェクト、二〇一七)に詳しい。水口一志氏は、埋もれていた高崎節子の功績を発掘、その生涯について調査なさっている。高崎節子が手掛けた小説には「支那との境」(『女人藝術』一九三二・八、高崎せつ子名義)、「山峡」(『婦人公論』一九三九・七、本田小浦名義)、「人身売買」(同光社、一九五四、本庄しげ子名義)などがある。「人身売買」には「売られゆく子供たち」という副題が付されている。「山峡」は懸賞短編入選作として掲載された。選者は川端康成。他の入選作は、城井昭「残されたる者」、森岡和子「流れ」。その際の著者略歴には、「(本名山下節子)

明治四十三年東京市小石川区原町にて出生。大正十五年大分県別府高女卒業、昭和四年福岡女子専門学校文科卒業。昭和十年機械工学専攻の間組の一エンジニヤール山下利助と結婚、以来工事現場を転々と流転してゐます」とある。また、高崎節子女史三周忌記念出版実行委員会編集・発行『むらさき』（一九七六、九）には年譜が付されている。江刺昭子他編著『時代を拓いた女たち第三集 かなわの112人』（神奈川新聞社、二〇一九）にも取りあげられ、経歴が紹介されている。

3. 福岡女学校のほか、朝鮮平安北道新義州高等女学校での教員歴（一九三〇～三二）もある。

4. 『福岡女学院百年史』（福岡女学院、一九八七）。教科は国語。また『教務日誌』から昭和二二年度は専攻科の担任であったことも確認できる。『むらさき』（前掲）の年譜には、歴史、国語教員として奉職とある。現在、福岡女学院の資料室に展示されている（出征した兵士たちに送られた）慰問帖を作成したのは、一九四三年に福岡女学校に通っていた学生たちで、高崎節子在職期間に重なる。慰問帖については、拙稿「文藝雑誌『こころ』のグルッペ——「精神的、文化的気圏」を生成する「少女」たち——」（『福岡女学院大学紀要 人文篇』二〇一九）も参照されたい。一九四五（昭和三〇）年には、高崎節子は朝日新聞西部本社企画部、婦人部嘱託となっており、例えば、「司令部民間情報局企画部婦人部長」エセル・ウイードが九州を訪問し、座談会が開催された際には「婦人有識者」「福岡女学校教諭」として参加している（「新しい女性のあり方」①②「西日本新聞」昭三・二二・一一、一一）。

5. 福岡空襲で、講堂や図書館などを消失し、焼けた瓦や木を片付けた昭和二〇年六月二十四、五日頃の翌日から毎日行われた「青空礼拝」については、徳永徹『凜として花——輪——福岡女学院ものがたり』（梓書院、二〇二二）などに詳しい。

6. 高崎節子は一九三五（昭一〇）年に山下利助と結婚し、在職中は山下節子であったため、署名は山下節子となっている。

7. 『むらさき』での署名は中島信子。同窓会名簿により和栗信子と同一人物と確認できる。

8. 石塚彰『経過報告』（『むらさき——高崎節子追悼集——』一九七六）

9. 立石多真恵（東京婦人少年室協働員）は『むらさき』（前掲）で、「新聞少年への情熱が後年売春問題対策に向けられ、八王子補導院での先生のご実績はおそらく空前絶後のものと申しても過言ではない。新機軸な、情緒豊かに夢を持たせた院政であった」とし、「良書の場所も与えずに悪書追放とはなにごとぞと、勤労青少年保護旬間中、猛烈な情熱を施策にうち注がれた」姿を伝えている。

10. 神崎清「はしがき」（『混血児』同光社磯部書房、一九五二）

11. 下地ローレンス吉孝『混血』と『日本人』——ハーフ・ダブルミックスの社会史——（青土社、二〇一八）。エリザベス・サンダー・ス・ホームを創設した澤田美喜は一九五三年に聖ステパノ学園を創設した。学園創設以前から「混血児だけの学校 サンダース・ホー

- ムで計画」（一九五二年十月二日「朝日新聞」東京 朝刊 七面）などの報道がなされている。「朝日新聞」（東京版）の一九五二年一月の記事を追うだけでも、一四日に「混血児、一般校へ 神奈川 入学対策に結論」（朝刊 七面）、一九日に「混血児の入学問題」（朝刊 三面）、二七日に「混血児も普通校へ 児童福祉審議会で 文部省の方針説明」（朝刊 七面）と連続する。そのような報道が続くなか、一七日の読書欄に高崎節子の混血児が取り上げられている（朝刊 四面）。
12. 一九五三年蟻プロ作品。井上堯、高原行制作、小林文子企画、八木保太郎構成、片岡薫、西澤裕脚本、関川秀雄監督。キャストは夏川静江、細川ちか子、田所千鶴子、斎藤美和など。片岡薫は「混血児」の取材中に、米軍基地の問題を取りあげなくてはと考え、一九五四年に『狂妄—古部とアメリカ兵』（サバンナ作品）へとつながったと述懐する（「取材ドキュメント」『片岡薫シナリオ文学選集第五卷』龍溪書舎、一九八五）。
13. 一九五三年一月七日「神奈川読売新聞」（八面）には、「特殊教育は禁物 混血児 高崎女史が映画化し社会に訴う」の見出しがつけられて、「今春四月には混血児が初めて就学する年で、一般小学校へ入学させるか、あるいは他の特殊教育を行うかについて各方面で論争されている折、労働省婦人少年室神奈川分室室長高崎節子女史（…略…）が、全国の混血児収容者の三分の二を占めるといわれる県下の五施設収容児二百五十名と、町中に潜在する混血児の実態をまとめ昨春出版して好評を博した「混血児」がこのほど（…略…）映画化されることとなり、混血児の実態がセミ・ドキュメンタリーで赤裸々に社会に対し訴え、混血児保護の在り方について大きな社会的反響をまき起すものとして注目されている」と『混血児』の映画化が報じられている。また、映画「混血児」について、「これは混血児問題をめぐる一つのルポルタージュと云つてよく、作者の意図もこの問題の啓蒙にある」として、「悲劇」を「政治的な目的に利用した形」になっているとする映画評（進藤光太「混血児」『キネマ旬報』八七九号、一九五三）もある。
14. 高崎節子「あとがき」（『混血児』同光社磯部書房、一九五二）
15. たとえば上田誠二『混血児』の戦後史（青弓社、二〇一八）では、占領期に労働省婦人少年局神奈川県婦人少年室で主任を務め、丹念なフィールドワークを行った人物として高崎節子に触れており、高崎節子の『混血児』を「本としては戦後初の混血児ルポルタージュ」として紹介している。
16. 高崎節子『混血児』（前掲）では、巻頭にエリザベス・サンダース・ホームの写真が掲載されている。エリザベス・サンダース・ホームについては、澤田美喜『母と子の絆——エリザベス・サンダース・ホームの三十年』PHD研究所、一九八〇）、澤田美喜『黒い肌と白い心——サンダース・ホームへの道』（日本図書センター、二〇〇一）などに詳しい。高崎節子がかいたものには、「混血

児の慈母澤田美喜夫人の苦闘物語」(『主婦之友』三七卷三三、一九五三)や「白い子・黒い子の悲しみ」(『文藝春秋』三三卷八号、一九五五)などがある。

17. 章立てとしては4つ「白い芽・黒い芽」「混血児の『履歴書』」「混血児の母とパンパンと」「七つの人種が一つの芝生に——エリザベス・サンダース・ホーム——」となっており、「白い芽・黒い芽」には「訪問者」「黒い子の祈り」「鯉のぼり」「神学生ポノー」「赤いハンド・バック」「夢がたり」「夜を待つ子」「チロルの鈴」「高原の子」「マグノリアの花咲く家」の小説が収められている。昭和二十七年十月二五日発行の『混血児』では、小説が続く「白い芽・黒い芽」の前に評論的な形式を有する三作品が置かれていた。昭和二十八年四月一五日初版発行、昭和二十八年五月二〇日再版発行と奥付にある「混血児」の表紙には、「敗戦の落し子」と副題が付され、更に並びも異なり、小説群の方が前に置かれている。以下、小説の方のそれぞれの概略を記しておく。訪問者は、慈善心の満足を味わうための「貴婦人」やピクニック気分「女学生」が訪れるホームに、「混血児のみなさん、ごめんなさい」という訪問者がくる。「青い眼の混血児の父親の代表」としてのロナルド軍曹と、「黒い皮膚の混血児の父の代表」としてのホームビー軍曹だ。その後、両親もわからない短い一年の生涯を閉じた子ども告別式にふたりは列席するという話。「黒い子の祈り」は、マユミはもう「なぜあたしは黒いのですか?」とママちゃまに聞かない。遠くの海の方を見つめるだけ。金髪のマリと遊びたいが、マリは同じ金髪のマユミをマユミより優先するという内容をもつ。「鯉のぼり」は、「男に裏切られて、相手の新しい女と話し合中に女を殺しそこなつて」服役中のハルの物語。保釈中に関係をもつた「黒人兵」との間に正男ができ、刑務所で出産し、ホームに預ける。出所したハルは初節句の正男のために、鯉のぼりをホームに届ける。「神学生ポノー」では、「五人の子供をか、えた外地からの引揚未亡人」と関係をもつた「G I」として日本に駐在していた神学生」のポノーの苦悩が描かれる。ポノーはヨハネによる福音書の第八章二節から十一節に登場する「女」に自分を擬えるような夢を見て、眠りから覚める。「赤いハンド・バック」は、「黒い子の祈り」で焦点化されていたマユミの母親側からの物語。題名の赤いハンド・バックはマユミが好きな玩具。ホームに預けられる際にマユミとともに託される。「夢がたり」は、ママちゃまが汽車のなかで手紙を読む姿から物語が始まる。父親の薬を入手するためにオーストラリア兵と関係を持ち、和夫が生まれたという女性から、父親が他界した後、「生活のこと、世間の人の冷い目のこと、そして学校のこと、将来のこと」を考えると、「とても私には和夫の幸福を守つて」やれないと考え、ホームへ預けることを願う内容。ママちゃまはその子連れにきたのだ。「夜を待つ子」は、博多湾に引き揚げてきて、祖父の家に身を寄せる信子の物語。その子どもである義男は、「ロシア系の混血児」。母子は身を隠す様に土蔵で暮らしていたが、義男が学齢期になったので、収容施設に預かってもらうことにする。次の「義

男のお母さん」では、義男の目線で土蔵での暮らしが語られる。そして、「お母さんが混血児収容施設の峯村主事に話した義男のこと」で、「義男のお母さん」である信子が語った収容施設へ入る際の言葉が綴られる。「チロルの鈴」は、「終戦の翌年横浜駅の共同便所の中にすてられていた黒の混血児」マックスの物語。育てられていたホームに「黒人の兵隊とお嫁さん」が訪ね来て、「どうしても自分の子供にほしい」といったため、ホームを離れることになった。そのホームでの別れの様子が描かれる。「高原の子」は「一夏病身をさげた私が世話になった別荘番の話」として、町子の物語と譲二の物語が語られる。町子はアメリカ将校ライマン中尉の「ジャパニーズ・ワイフ」であった。ライマンが来なくなって半年してから、町子は女の子ユミを出産する。「町会議員で民生委員の床野さんへ扶助料を受け取りに行く度に、祖母は彼女の混血の孫娘の将来と狂人の娘の余生を嘆くのであった」という文で結ばれている。もうひとつの物語の中心人物、譲二は祖父父母のもとK高原で暮らしている。「譲二の魂が傷つけられないために」祖父は「譲二を守りたいと決心して」おり、入学準備を譲二が満三歳になった時から始めている。「長生きすると、変った孫に恵まれます。可愛い、ものです。生命があるのですから。人間死ぬまで何か、することがあるものですね」という祖父の述懐で結ばれている。最後の「マグノリアの花咲く家」については、本稿のなかで取り上げる。

18. 映画『混血児』のシナリオは、『シナリオ』（九卷三号、一九五三）と『片岡薫シナリオ文学選集第三卷』（龍溪書舎、一九八五）などで確認することができる。映画では冒頭から登場するヘンリーが中心的人物として描かれているが、「訪問者」の「貴婦人」たちの訪問の様子、「草原の子」の前半の町子とライマン中尉の物語、「黒い子の祈り」「チロルの鈴」「鯉のぼり」「夢がたり」が部分部分の挿話として活用されている。結末の小学校就学に備えての「体格検査」の前日及び当日の場面と、そこから飛び出してさまようヘンリーの姿は、原作には見られない。一方で、遠賀の土蔵で暮らす「夜を待つ子」、高原で就学の準備をする譲二の物語、そして、福岡を舞台とした「マグノリアの花咲く家」は、現存するシナリオから推測する限り映画では採られていない。

19. 高崎節子在職時の福岡女学校の所在地は福岡市薬院五二三（現在の福岡市中央区薬院四丁目）。また、福岡市中央区平尾三丁目には福岡県立中央高校、当時の福岡県立福岡高等女学校がある。

20. 文学の編んだアンソロジーを詞華集と呼ぶ。蝶は「プシケケー」あるいは「あやはびら」などと称され、魂を髣髴とさせる。文学作品という華を、夢うつつ、虚構と現実、生死を越えて存在する魂の気配は、蝶に結びついてゆく。文学における「蝶」表象については、安藤公美・大國眞希「初夏の黄蝶から秋の醜き蝶へ―芥川龍之介から太宰治へと」《蝶》は舞うことができたろうか」（福岡女学院大学人文学部紀要）三一号、二〇二二）なども参照されたい。

21. 拙稿「(蝶)を夢みる文学―福岡女学院との関わりから―」(『福岡女学院資料室ジャーナル』三号、二〇二二・七)。

22. 「弟への手紙(絶筆)」には「もう大きなスケジュールは余命的に望めませんが、「遊行女児島」をヒロインにして、当時、万葉のころの太宰府の、多くの都から転動してきた大友家持や億良や黒人など、古代の旅の官僚、詩、歌人と遊行女を一応舞台に出させて、遠い故里の九州の文化の美しさ、素朴さ、人間くささと、そして、とてつもない官僚主義を、中国風なムードの中にまぜて、自然も美しく書きたいの。これは夢でなくほんとに実現させます」と書かれています。また、中野(和栗)信子も「お見舞いに伺いますと、心から喜ばれ、たくさんのお話の後、きつぱりと言われたのです。／「資料を集めました。これから書きます」と。」と証言している。〔むらさき〕前掲)。

23. 本稿とはアプローチを異にするが、西田桐子は、日本文学における〈黒人〉表象の傾向と特徴について分析し、〈黒人〉が戦後日本文学にもたらした「文学的想像力」を明らかにした博士論文『戦後日本文学の〈黒人〉——文学／芸術／政治運動と黒人表象(一九四五―一九六二)』(二〇一九)で高崎節子について日本社会の中で育つ「黒人混血児」が描かれる傾向にあるとされる「黒人表象史」の揺籃期の中で取りあげている。

*高崎節子につきましては水口一志氏に多くのことを教えていただきました。貴重な資料も拝見させていただきました。心から深謝申し上げます。有難うございます。福岡女学院につきましては資料室の井上美香子さん、中村奈央子さん、西山尚宏さんに大変お世話になりました。記して御礼申し上げます。有難うございます。

*現在では配慮が必要な表現がありますが、当時の資料から文章を抜粋したものなど、一部そのまま掲載しています。